

日本のキリシタン神社で行われる儀式 — 枯松神社祭、桑姫社大祭、ジュリア祭の比較考察 —

金 美 連

Miyeon Km. Rituals Held at Christian Shrines in Japan – Comparative study of Karematsu Shrine Festival, Kuwahime Shrine Festival and Julia Festival–. *Studies in International Relations* Vol.41, Consolidated Edition. February 2021. pp.93-104.

Christian shrine refers to the place where ceremonies are held in memory of Christians at the shrine of Shintoism. This paper is a comparative study on the following three festivals that are rites held at Christian shrines; Karematsu Shrine Festival, Kuwahime Shrine Festival, and Julia Festival.

The Karematsu Shrine Festival has been jointly held by Catholics, Kakure Kirishitans, and Buddhists every November since 2000. Though they were divided into three religions, their roots are the same in that their ancestors secretly believed in Christianity during the Edo period. The Kuwahime Festival is a ceremony to worship Kuwahime, the granddaughter of Sorin Otomo who was a famous Christian daimyo. After the tomb of Kuwahime was moved to Fuchi Shrine in 1936, the ritual began at the shrine. The Julia Festival has been held for honoring Julia who came to Japan as a Korean prisoner at a young age, became a Christian, and was finally exiled to Kozu island, because she kept her faith despite the command of the supreme authority at the time. There is a great particularity that the festival has been held as a Catholic mass since 1970, even though there are no churches or believers on Kozu island.

The rituals of the three Christian shrines could begin because the tombs of the three saints have continued to be enshrined. The rituals held at Christian shrines are performed in different ways, but what they have in common is that their deep feelings for graves and the custom of ancestor worship have supported the rituals of Christian shrines.

はじめに

日本の文化庁の統計調査によると、2019年12月現在宗教人口は、神道信者が約8千7百万人、仏教信者が約8千4百万人、キリスト教信者が約190万人である¹。神道と仏教信者を合わせると、日本人の人口1億2千6百万人をはるかに超える。一方、キリスト教信者は全体人口の1%しかならず、日本ではマイノリティーな宗教である。ところが日本の最大宗教である神道の神社でキリスト教信者を祀る儀式が行われているところがあり、それを「キリシタン神社」という。ここで「キリシタン」とは、クリスチャンを意味

するポルトガル語「Christão」から由来しており、明治時代初期までのカトリック信者を指す歴史的用語である。キリシタン神社はキリスト教の迫害の歴史や日本人の宗教観ともかかわっており、日本特有の宗教施設といえる。現在、日本のキリシタン神社として公認されている場所は3か所ある。長崎県長崎市の枯松神社と桑姫社、そして東京都伊豆大島のおたいね明神である。

本稿では、現地調査に基づき²、3か所のキリシタン神社で行われている儀式を比較考察する。儀式はそれを行う人々の世界観や宗教観を反映しており、儀式に携わる人々の行動様式や心情、社会関係などの理解を一助するためである。3か所

の儀式を一つの論文で取り上げるのは初めての試みであり、個々の事例を長く取り扱うには紙数の都合もあるため、ここでは巨視的な観点から日本のキリシタン神社で行われている儀式の性格や特徴を論じたい。

1. 日本のキリシタン神社に関する先行研究

長崎県は日本で初期にキリスト教が伝来された地域であり、現在も人口に占めるキリスト教信者の割合が全国一である³。キリスト教の禁教時代に表向きは仏教徒や神社の氏子となりながら、ひそかにキリスト教の信仰を守った潜伏キリシタンが多くいたのも長崎県を含む九州地域であった。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」は、2018年7月に世界文化遺産に登録され、世界からも潜伏キリシタンは注目されるようになった。キリシタン神社という特異な現象も長崎県を中心に見られている。

昭和時代の隠れキリシタンの研究者である田北耕也によると、昭和時代には長崎市、五島、生月島にキリシタンを祀る祠や神社が9か所ほどあったという⁴。しかし、現在はその多くが廃れており、キリシタン研究者の片岡弥吉が自著で記した長崎市下黒崎町の枯松神社、長崎市の桑姫社、伊豆大島のおたいね明神が、一般的に日本のキリシタン神社と認められている⁵。

まず長崎市下黒崎町の枯松神社に関する研究は、隠れキリシタンの研究の中で取り扱われてきた。隠れキリシタンを直接のテーマとして扱った代表的な研究成果としては、昭和初期から昭和20年代にかけての現地調査による田北耕也の『昭和時代の潜伏キリシタン』（1954年）、戦後から昭和30年代の調査をもとにした古野清人の『隠れキリシタン』（1966年）、および片岡弥吉の『かくれキリシタン 歴史と民俗』（1967年）がある。そして昭和末期から平成にかけては宮崎賢太郎が『カクレキリシタンの信仰世界』（1996年）を皮切りに、研究成果を続々発表している。枯松神社と地域社会との関係については南山大学のロジェ・ヴァンジラ・ムンシが論文を発表した⁶。

片岡弥吉は1614年の徳川家康の禁教令以降か

ら1865年に大浦天主堂における信徒発見までのキリシタンを「潜伏キリシタン」、1873年にキリシタン禁教令が撤廃されたにもかかわらずカトリック教会に戻らず潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を維持し続けているキリシタンを「かくれキリシタン」と呼び、両方を区別している。このような区別は現在キリシタン史研究者の間でおおむね認められているため、筆者もこの区別の下で用語を使用している。そして隠れキリシタンについては様々な名称があるが⁷、本稿ではもっとも一般的に使われている古野氏の「隠れキリシタン」という呼び方を使用していることをお断りしておきたい。

次に長崎市にある桑姫社については、史料が少なく研究があまり行われてこなかった。1820年頃に編纂された『長崎名勝図絵』⁸には桑姫君墓が描かれ、自然石でできた墓石には、「大友家桑姫御前塚」と書いてあり、桑姫が歴史的人物であることを証明している。そして1821年（文政4年）に淵村庄屋第8代当主・志賀茂左衛門親籌が書いた文書『志賀家事歴』⁹にも、「桑姫御前」は「大友の御姫於西御前」であると明記されている。また『志賀家事歴』には長崎奉行に抜擢された豊後国府内城主・竹中采女正によって淵村庄屋職に指名された志賀宗頼が、「大友家の御姫於西御前」を「御介抱申し上げ」たこと、などが記されている¹⁰。

ただ、大友家は没落しており、桑姫が生きた時代は禁教令が発令されていたため、桑姫が誰であるかは明らかではなかった。その中、1829年（文政12年）に淵村庄屋志賀家第九代親善と町年寄・薬師寺久左衛門種茂ら旧大友家遺臣4人が、桑姫の由来を記す巨大な「天女廟碑」を同村の氏寺・宝珠山能満院萬福寺（現淵神社）の境内に建てた。その石碑には桑姫が「大友義統二女」として紹介されており、没年は「寛永4年（1627年）8月7日」と刻まれている。

初めて桑姫を明確な歴史的人物と結びつけたのは片岡弥吉である。片岡は1937年に書いた論文で桑姫は18歳で病死した在俗修道女マキセンジアと紹介している¹¹。彼女は大友宗麟の次女テクラとその夫である久家三休の娘であるが、石碑を

建てた当時はキリシタン禁制下であったため、著名なキリシタンである大友宗麟の代わりに、キリシタンを迫害した息子の友義統の娘として記されたと推察されている。しかし、マキセンジアは1605年（慶長10年）に死去しており、桑姫の死亡年と異なるため、片岡氏の主張に異論を唱える学者もいるが¹²、桑姫は大友宗麟の孫娘であるというのが一般的な見解である。

3番目の東京都伊豆大島のおたいね明神についても記録が乏しく、それが誰を祀ったか明らかではないが、概ねおたあ・ジュリアを祭ったものであるとみなされている。おたあ・ジュリアは朝鮮半島出身の女性で、文禄・慶長の役の際に日本に連れて来られキリシタンになったが、1612年に徳川家康の命令に背き、伊豆大島や新島、神津島に流刑になった。伊豆大島の波浮港から東北2キロほどのオタイネ浜の断崖の上に小祠があり、そのすぐ隣に大きな十字架も建てられ、島の観光地の一か所になっている。しかし、現在大島では祠が祭られることはなく、祠もだいぶ老化している。ジュリアを祭るジュリア祭は伊豆大島から南に60キロ離れた神津島で毎年開催されている。

ジュリアのことが話題にのぼるようになったのは、1880年にジャン・クラセ（Jean Crasset; 1618-1692）の『日本西教史』が日本語に翻訳刊行されたことによる。他にも『1612年度日本イエズス会年報』や、ペドロ・モレホンの『日本殉教録』、レオン・パジェスの『日本切支丹宗門史』などに彼女のことが取り上げられていた。ところが、『日本西教史』はフィクションが多く史料として認められないこともあったが、上智大学のチースリク神父が、ローマのイエズス会蔵本のロドリゲス・ジラン神父の『日本イエズス会の通信』（1613年1月20日）の中からジュリアに関する資料を発見し、『日本西教史』がこの書簡などによるものであり、ジュリアに関する記述も事実であることが確認されたのである¹³。

神津島でジュリア祭が開催されるようになったのは、それまで謎だった墓がジュリアのものとして公認されたからである。1950年代に神津島の郷土史家であった山下彦一郎は、流人墓地にある大きな二重の塔が朝鮮風の形をしており、塔身の

四面の窓が田形の十字だったため、ジュリアの墓だと主張した。そして1957年に東京都教育委員会が文化財の調査をした際に、この二重の塔をジュリアの墓だと認定した。それで1970年からはジュリア祭が毎年開催されることになり、それから調査報告書が刊行されたり、韓国でも数編の論文が発表されたりした。

これらキリシタン神社について、桑姫社を除き、2か所の神社は辺境な所にあり、しかも長崎と伊豆諸島という大変離れた場所にあるため、これまで3か所を一緒に取り上げた研究は行われなかった。本稿では3か所のキリシタン神社で行われる儀式の背景やその内容を整理し、3か所の儀礼の性格と意義を考察したいと考える。

II. キリシタン神社の儀式

1. 枯松神社祭

枯松神社（写真1）は長崎県長崎市下黒崎町に位置している。黒崎地域は平坦な土地が少なく、やせ地の水田と海に面した急傾斜の丘陵が多い地域である。そのため、海に近くても船着場になるような入り江がなく、住民は貧しい生活を余儀なくされてきた¹⁴。この地域は江戸時代大村領であったが、一部には佐賀鍋島領の飛び地が存在していた。そして枯松神社はその佐賀鍋島領の飛び地に存在していた。1563年に大村領主・大村純忠が洗礼を受け、日本で最初のキリシタン大名になり、それから大村領内のほとんどの領民が藩主の勧めでキリシタンになった。1582年には大村領のキリシタンは6万人、当時日本のキリシタン総数は15万人だったから、大村領だけで全国総数の4割を占めていたほどであった¹⁵。しかし純忠の息子喜前、その子純頼は背教し、大々的な弾圧を行った。厳しい迫害の中でも、ここの黒崎地域はキリシタン信仰を継承している数少ない地域の一つである。

しかし1867年に出津で起きた野中騒動¹⁶を契機に、潜伏キリシタンたちは二派に分裂した。出津の野中にある村役人の家で隠れキリシタンの聖画をめぐり、潜伏キリシタン同士で争いが起こったのである。その騒ぎのわだかまりにより、

1873年に禁教令の高札がおろされた後もカトリック教会に復帰する人たちとそれまでの信仰形態を続ける人たちの二派に分裂し、後々の代まで対立のしこりが残ることになった。その後1972年にはそれまで寺を隠れ蓑にしていた隠れキリシタンの中から寺を離れると宣言するグループが現れた。それで黒崎地域の隠れキリシタンは「寺離れ派」と「寺付き派」に分かれた。さらに1985年には出津の7家族が隠れキリシタン社会から離れ、天福寺の檀家に入り、ごく普通の仏教徒になった。2004年には出津の帳方¹⁷・村上春義が逝去し、一人を除き寺付き派の全員が天福寺の檀家となったため、出津の隠れ組織は解散した。そのため、黒崎地域は現在黒崎の隠れキリシタン組織とカトリック黒崎教会の信徒、天福寺の仏教徒、これら3派に分かれて生活している。

枯松神社は正式に神社として登録されてはいないが、1914年下出津の浜崎清造が日独戦争凱旋御礼に「サン・ジワン枯松神社」と刻んだ石の祠を奉納し、以来広く枯松神社と呼びならわされてきた。これは禁教時代に密かに活動した外国人宣教師、サン・ジワン神父の墓の上に建てられている。かつては大きな二本の松の木の下に墓石があり、その上に小さな祠がのっていただけだったが、1939年に堂が建てられた。現在の建物は2003年に当時の姿のままに再建されたものである。枯松神社の前面の平地にはいくつかの墓石が並んでおり、神社を少し下ったところにはキリシタンの共同墓地がある。そして参道中腹の左側には禁教の時代に密かに集まり、隠れキリシタンの祈りの文言であるオラショを伝授し合ったとされる巨岩がある。枯松神社は1991年に外海町文化財に指定され、現在は長崎市の文化財となっている。

枯松神社で祭られているサン・ジワン神父は、1610年に有馬晴信が長崎港外で焼き沈めたポルトガル船マードレ・デ・デオス号に乗っていたジョアン・デ・アモリス神父であるという説がある¹⁸。「サン」は聖を意味するSaintからきた言葉であり、「ジワン」はJohnから由来している。ジワン神父は徳川幕府による弾圧のさなか、外海キリシタンたちの信仰を指導し、迫害に挫けない勇気と救いへの希望を与え続けた。しかし病弱し、

枯松の裏の谷に移動し養生に専念していたが、大雪で食料が途絶え、亡くなってしまった。

サン・ジワン神父の弟子バスチャンはジワンの通訳として一緒に同行しながら、西彼杵半島の伝道に励み、枯松神社祭ではジワン神父と共に祭られている。彼は聖セバスチャンの霊名をもつ日本人伝道師である。1657年に黒崎で捕らえられ、長崎の牢で3年3か月間苦しめられた後、斬首刑で殉教した。彼は「7代経ったらパードレ（神父）がローマから船でやってくる」という予言をしたことで有名である。そして黒崎地域では「バスチャンの暦」が継承されてきたが、それはカトリック教会の典礼暦に当たるもので、バスチャンがこの地域のキリシタンに教え、それが禁教下のキリシタンの毎日の生活規範になり、隠れキリシタンの組織を維持させるにおいて機能した。

枯松神社祭が始まったのは、1998年にカトリック野崎教会に就任してきた野下地年神父が、三者のわだかまりを解こうと呼びかけたのがきっかけである。2000年11月5日に最初の枯松神社祭の式典が執り行われ、以後、隠れキリシタン、黒崎教会、天福寺の檀家の三者によって開催され続けていたが、2017年と2018年は三者の意見の違いにより、別々に儀式を行った。2019年はローマ法王が38年振りに長崎を訪問することになっていたため、再び三者共同で第20回枯松神社祭を開催した。2019年11月3日にカトリック信者、隠れキリシタン、仏教徒の3派約200人が集まり、この地域で布教活動を行った外国人宣教師サン・ジワン神父や、その弟子バスチャン、先祖たちを慰霊する神社祭が開かれた。第20回枯松神社祭（写真2）のプログラムは次の通りである。



写真1 枯松神社



写真2 枯松神社祭

第1部

- ・みことば（聖書）の祭儀（25分）

- ・オラシヨ奉納（10分）
 - ・法話（10分）
- 第2部
- ・グレゴリオ聖歌とオラシヨによる祈り

第1部では、まずカトリック黒崎教会の橋本勲司祭（当時77歳）の司式でミサが行われた。説教や祈り、数回にわたる賛美があった。橋本司祭は11月に来日するフランシスコ・ローマ法王が平和を強調したように、三者が互いの違いを認め合い、黒崎地区から世界に平和を発信できればと述べた。

次に、隠れキリシタンの帳方・村上茂則氏（当時69歳）が、禁教時代から口伝で受け継がれるオラシヨを奉納した。オラシヨとはラテン語のOratio（祈り）に由来する祈りの文言である。日本語のオラシヨもあるが、ラテン語やポルトガル語のオラシヨもある。日本語にラテン語やポルトガル語が混じったものもある。宣教師が伝えたものを伝承したものもあれば、潜伏時代に家内安全や、無病息災、豊作・大魚、除災招福などの現世利益的な内容を含む創作されたオラシヨも多く存在する。オラシヨは潜伏キリシタンの信仰を支えるものであったが、その意味を理解するものは少なく、呪文のように唱えられることが多い。迫害時代には声に出さず口の中で唱え、伝授も密に行われた。村上茂則氏は黒崎で7代目の帳方を務めているが、オラシヨを声に出して唱えるようになったのは、父・村上茂氏の代からである。40年ほど前に茂氏がある葬式で声を出さずに祈っていたら、何を祈っているのかが分からないと言われ、それから声を出して唱えるようになったという。そして枯松神社祭でも隠れキリシタンを代表してオラシヨを公唱した。2005年に茂氏が亡くなってからは茂則氏がオラシヨを唱えている。

その後、天福寺の塩屋秀見住職が法話を語った。天福寺は1688年に創建された曹洞宗の寺院で、潜伏キリシタンを守ったとして黒崎周辺の人々から厚い信頼を得てきた。キリシタン迫害の時代に天福寺は「この檀家にキリシタンはいない」といって潜伏キリシタンを庇護してきた。その日、塩屋住職は迫害時代に寺が潜伏キリシタンの信仰

を認め守ったように、お互いの価値観を受け入れ、争わないのが平和の道であると述べた。

2部ではグレゴリオ聖歌とオラシヨによる祈りが行われた。グレゴリオ聖歌は、無伴奏、無旋律で歌われる中世のカトリック教会の聖歌である。日本でもキリスト教の伝来とともに教会でこの聖歌が歌われたが、禁教令により密かに聖歌や祈りを口伝えしていく中で、いつしかメロディーは失われ、歌詞だけがオラシヨに受け継がれていった。オラシヨとグレゴリオ聖歌の共通点を示すために、声楽家の女性は主の祈りやクレド、アヴェ・マリアなどをグレゴリオ聖歌で歌い、村上茂則氏はそれに似たオラシヨを唱えた。両者の祈りの言葉の共通点は大きい認められるものであった。

村上氏は神社祭の後に、「枯松神社祭はサン・ジワン様を祀る儀式なのでこれからも三者が協力して続けていくことを望む」と語った。そしてそれぞれ宗教が違って普通は仲良く過ごしていることと、11月24日に長崎を訪問するローマ法王のミサには参加したいことを述べた。

2. 桑姫社大祭

長崎市にある淵神社は、昔神宮寺支院の遺跡で、裏山の宝珠山の山頂に虚空蔵菩薩と玄武神を、この地に弁財天を祀り、これを妙見社と呼んでいた。しかし、1573年（天正年間）にキリシタンの社寺破壊によって焼失してしまった。その後、1634年（寛永11年）に弁財天を勧請して古に復元し、「稲佐弁天社」と呼び淵村の総鎮守となった。明治維新の神仏混交の禁止により淵神社と改称し、以来、宗像三女神（田心姫命、市杵島姫命、湍津姫命）を主祭神として祀っている。

キリシタン神社である桑姫社（写真3）はこの淵神社の拝殿左手にある。桑姫社ではキリシタン大名・大友宗麟の孫娘である桑姫（洗礼名：マキセンジア）を祀っている。大友氏滅亡後、宗麟の妻ジュリアとともに次女の娘であるマキセンジアが長崎に移り住んだ。マキセンジアは桑を植え、養蚕を周囲の人々に広め、没後は墓に桑の木が植えられたことから「桑姫」と呼ばれるようになった。

1820年頃に編纂された『長崎名勝図絵』に描かれている桑姫の墓石は当初から志賀家敷地内で

祀られていた。その後 1837 年（天保 8 年）に石祠（写真 4）が元大友氏の重臣で、代々浦上淵村の庄屋を務めた志賀家子孫により製作された¹⁹。これは 1899 年、淵村尾崎の庄屋屋敷が兵営地になったため、第 11 代志賀親朋が法入の地に移設したが、その際、桑姫が「大友義統公二女」であり、没年は「寛永 4 年 8 月 7 日」であると彫り込まれた。それから 1936 年（昭和 11 年）にこの石祠と墓石が淵神社の境内に移転され、それが「桑姫社」になった。桑姫社殿下には桑姫の墓石が置いてあり、格子越しに見ることができる。

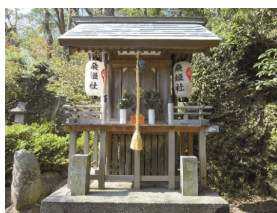


写真3 桑姫社



写真4 桑姫の石祠

また 1829 年（文政 12 年）には、淵村庄屋志賀家第 9 代親善と町年寄・薬師寺久左衛門種茂ら旧大友家遺臣 4 人が、桑姫の命日が旧暦の七夕の日であることから桑姫の徳を称え、「天女廟碑」を同村の氏寺宝珠山能満院萬福寺（現淵神社）の境内に建てた。その石碑には彼女の生涯について千字を越える漢文で刻んでいるが、そこにも桑姫は「大友義統公の二女」と紹介されている。

桑姫の遺徳を偲ぶ行事は志賀家によって 1627 年から春秋に行われていたが、1936 年に桑姫の墓石が淵神社の境内に移されてからは、神社で祭られるようになった。しかし、キリシタンである桑姫を神社で祀り崇めることになった経緯は不明のままである。片岡弥吉は迫害禁教の長い年月の間マキシエンがキリシタンだったことは忘れられ、その遺徳のみを伝承し、遂に桑姫社として祀ったのではないかと推察している²⁰。

淵神社で開催されている桑姫社大祭に関する内容は以下の通りである。

毎年 8 月 7 日に桑姫社大祭が行われるが、特別な祭りをすることはなく、宮司がお供えをするだけである。午前中に宮司が桑姫社にお神酒や米、塩、水、果物を供える。夕方に供え物を下げ、行事は終わる。淵神社の関係者の話によると、

この日に桑姫社だけにお参りする人はいなく、淵神社を定期的に参拝する人が淵神社を参拝した後には桑姫社にも参る場合がほとんどであるという。そして桑姫と縁が深かった志賀家は今でも淵神社や桑姫社を参拝することがあるという。神社ではキリシタンを祭ることに違和感はないという。なぜなら桑姫はごく近くに住んでおり、若い女性に機織りの技術や礼儀作法を教え、地域の人々に親しまれていたからである。桑姫が旧暦の七夕に亡くなったことにちなみ、以前は旧暦 7 月 7 日に桑姫を祭ったが、現在は 8 月 7 日に祭っている。そして桑姫は七夕に亡くなったため、縁結びの神様としても深く崇敬されている。

3. ジュリア祭

まず、ジュリア祭で祭られているおたあ・ジュリアについて紹介したい。

おたあ・ジュリアは文禄・慶長の役で小西行長の捕虜として日本に連れてこられた。当時ジュリアの年齢は 3 歳とも 5 歳とも言われているが、史料が残っていないため、確かなことは分からない。キリシタンであった小西行長の夫人の保護を受けたジュリアは、1596 年に天草志岐のイエズス会修道院長ペドロ・モレホン神父から洗礼を受けてその名で呼ばれた。ジュリアは関ヶ原の合戦で行長の死後、どういう因縁だったか、幕府の大奥に仕える侍女になった。ジュリアの駿府城での様子は、イエズス会のジョアン・ロドリゲス・ジラン神父がイエズス会総長に当てた 1606 年 3 月 10 日付の書簡に次のように記されている。

宮殿で公方に仕える女性の中に何名かのキリシタンがいます。その中の 1 人は高麗人で、[かつて] アグスチノ撰津守殿 [小西行長] の妻に仕え [たこともあり]、きわめて信心深い生活をしています。時にはその信心ゆえの振舞いを抑制する必要があるほどで、その信仰生活は、俗世を離れて世間の煩しさを慣習に束縛されていない大勢 [の修道女] に劣らないほどです²¹。

ジュリアは思慮深く、分別ある行動で徳川家康からの寵愛を受けていた。しかし、1612 年に家康から強く改宗を迫られたがこれを堅く拒否した

ため、遂に流刑に処され、伊豆大島に流された。そこで30日を過ごした後、新島に移され、15日間滞在した。さらに神津島に移され、その後40年間キリシタンとして節を曲げず、厳しい流人生活を続けて、神津島でその生涯を終えたといわれていた。しかし1988年にイエズス会のルイス・デ・メディナ神父の研究により、1620年3月25日付長崎発信の次のような書簡が見つかった。

彼女等の1人、高麗生まれのジュリアは、ロサリオ〔の祈り〕の大好きな人で、そのSanta Cofradiaのために常によく働いていたので、何回か自分の家から追い出され、今は家もなく、神の慈悲の御摂理に依り縋りながら、家から家へと移り歩いています²²。

そして1622年2月15日に当時のイエズス会日本管区長フランシスコ・パチェコ神父が書いた書簡の末尾には、「信仰の為に追放された高麗人の大田ジュリアは、いま大阪にいる。私は既に援助したし、出来る術で施している²³」と追記されている。ジュリアが長崎や大阪に留まったというこれらの記録の発見により、ジュリアの最後は謎になってしまった。

神津島の村の中央の坂には流人墓地があり、そこには江戸時代にこの島に流された日蓮宗不受不施派の僧侶たちの墓石が20以上ある。しかし、そこには僧侶の墓石とは明らかに異なる大きな二重の塔（写真5）が西側に立っており、しかも十字の模様が刻まれている。島民たちはこれを宝塔さま、篋塔さまと呼んでいた。流人墓地は近寄るも不気味な場所であったが、この宝塔さまにお参りすれば婦人病が治ると伝えられていて、島の女たちは榊や檜を供えて手厚く祀っていたとも言われている²⁴。

350年間この墓塔が誰のものなのかが謎であったが、『日本西教史』などの文献を通じてジュリアが神津島にいたことが知られるようになった。そして1957年に東京都の文化財調査団が流人墓地を調査した際、この墓塔をジュリアのものと認定した²⁵。その後、1970年から毎年5月にジュリア祭を開催している。2020年はコロナウィル

スによって中止になったが、2019年までは毎年開催された。

当時神津島の村長であった松本一氏は島の有志らと一緒に東京カトリック教区の大司教を訪ね、ジュリアのためにミサを執行してくれることをお願いした。なぜなら「彼女は、追放に際して最も悲しいことは告解をしたりミサに列することが出来ないこと²⁶」だと言ったからである。その後、ジュリアを福者に推薦する署名運動も起きた。1975年にはローマ法王にジュリアの功徳を知らせるために松本村長をはじめ、36人がローマへ行き、法王に謁見した。1981年にローマ法王ヨハネ・パウロ2世が日本を訪問した際はジュリアの人形を法王に贈った。それから1985年には神津島の村落をよく見渡せるありま展望台に、ジュリアを記念して10メートルの十字架を建てた。

ジュリアを約400年振りに韓国へ帰郷させる計画も立てられた。1972年10月に松本村長や関係者ら30人はジュリアの墓の土を持って韓国を訪れた。その土は韓国の切頭山殉教者記念館の広場に埋められ、そこには記念碑も建てられた。これが日韓交流のきっかけになり、1973年に開催された第4回ジュリア祭には韓国カトリックの盧基南大司教をはじめ、韓国から40人が参加した。1973年10月12日には韓国でもジュリア祭が開催され、神津島から30人が韓国に出向いた。その後も日韓の交流は続き、特に1989年から1994年までは毎年韓国から100名以上が神津島を訪れた。しかし、ジュリアが神津島で最期を遂げてないかもしれないという疑念により、2001年以降韓国からの訪問客は途絶えてしまった。それでも第4回ジュリア祭から現在まで毎年東京韓国学校の生徒が伝統芸能を披露することにより、日韓交流の媒介の役割を果たしている。



写真5 ジュリアの墓塔



写真6 ジュリア祭

2019年5月18日、19日に開催された第50回ジュリア祭(写真6)の日程は次の通りである。

2019年5月18日(土)

13時30分 ジュリア墓地墓参(献花)(ジュリア墓地)

14時00分 第50回ジュリア祭ミサ(ジュリア顕彰碑広場)

15時30分 日韓親善芸能大会(神津高校体育館)

出演団体:東京韓国学校舞踊部・神津高校
神津島芸能保存会・神津島太鼓

18時00分 第50回ジュリア祭式典
夕食会(まっちゃーれセンター)

2019年5月19日(日)

8時30分 ミサ(まっちゃーれセンター)

9時45分 お別れの会

まず参加者たちはジュリアの墓に行って一人一人献花をした。ジュリアの墓塔の前には献花台とともにメロンや、オレンジ、胡瓜が供えられていた。カトリック式ではあるが、食べ物が供えられていることは民俗との習合によることであろう。それから村の広場で第50回ジュリア祭が開催された。日本各地から訪れたカトリック信者120人と神父7人、島の関係者が参加して、カトリックのミサが行われた。聖体拝領も含め、カトリックミサの形式をすべて守りながら厳粛に行われた。

その後は神津高校の体育館で日韓親善芸能大会が行われた。東京韓国学校の校長、教師3名、生徒23名、そして神津島の島民が参加し、日韓の伝統芸能を披露し、交流の時間を持った。東京韓国学校の生徒と島民たちが輪になって踊るのを見て、陸地から遠く離れている小さな島で日韓交流が行われていることに筆者は大きな感動を覚えた。

夕方には船舶待合所で第50回ジュリア祭記念式典が開かれ、続いて参加者全員で夕食会を開いた。翌日は日曜日なので、また船舶待合所でミサを捧げ、その後港でお別れの会をし、約120人

の外部からの参加者は帰途についた。

神津島という名前は神々が集まった島から由来している。島の名前の由来通りに、古来から神津島は敬神崇祖の観念が篤いところで、朝夕神社にお参りして、境内には常に白砂が敷き詰められていた。また島で唯一の菩提寺である濤響寺は今でも毎日、朝夕お参りをする人たちで賑わっている。墓地を大切にすることは他にその例をみないほどであり、墓前には香華を絶やすことがない。その他にも至る所に地藏菩薩や猿田彦大申神、観音像などが立っており、民間信仰への信仰心も大変篤いことが窺われる。

しかし、これらの神々とは性格を異にするカトリックのミサが受け入れられたことは驚くべきことである。ジュリアに対する尊敬の念からとも、島の観光のためであるとも言われている。神津島で出会った人々に、カトリックミサで祭ることに違和感はないかと聞いたが、皆違和感はないという答えだった。あらゆる神々を大切にする神津島では宗教の形式より、苦難の人生を生きながらも人々に敬愛されたジュリアを祀り崇めることが島民の道理であるかと思われた。

III. キリシタン神社で行われる儀式の比較

ここではこれら3か所のキリシタン神社で行われる儀式を比較考察したいと考える。次の表1にその要点をまとめた。

表1 キリシタン神社で行われる儀式の比較

	枯松神社祭	桑姫社大祭	ジュリア祭
始まり	2000年	1936年	1970年
日にち	11月3日	旧暦7月7日から8月7日に変更された。	5月3週目の週末
提案者	当時カトリック黒崎教会の司祭	志賀家にあった桑姫の墓石が淵神社に移されたことによる。	当時神津島の村長と有志
主催者	カトリック教会、隠れキリシタン、仏教徒	神社	ジュリア顕彰会、カトリック東京教区
儀式の対象	ジワン神父、バスチャン、先祖	桑姫	ジュリア
儀式の性格	ミサ、オラショ、法話が行われる。(三者合同であるが、カトリック教会がより主体になっている。)	官司がお供えをするだけ(神道式)	墓地に献花、ミサ、日韓芸能大会、夕食会、日曜ミサ、別れ会(主にカトリック式)
神社の様子	ジワン神父の墓があった場所に堂が建てられた。神社として登録されてなく、鳥居もない。神社の前面の平地には墓石が並ぶ。	淵神社の境内社である。桑姫社殿下には桑姫の墓石が置いてある。桑姫社の西側には石祠があり、淵神社の境内には天女廟碑もある。	伊豆大島に小祠があり、神津島にはジュリアの墓がある。両島に大きな十字架が立っている。
参加者	三つの宗教に所属している住民の一部と外部の見学者が参加している。	神社参拝者だけ	ミサに島民の参加は少ない。外部のカトリック信者の聖地巡礼のようである。以前は韓国からの参加者も多かった。

左記の表1を見ると分かるように、日本のキリシタン神社で行われている儀式は三者三様である。儀式が始まった背景や儀式の内容については先述したので、ここでは儀式の性格や特徴を考察したい。

まず、枯松神社は禁教下で潜伏キリシタンが自分たちの信仰を異宗教的外観でカモフラージュするためにできたところである。潜伏時代にはジワン神父の指導を受け、同じ思いでこの場所を心の拠り所として崇敬していたが、明治以降、時代の変化の中で分裂せざるを得なかった地域の人たちが、歴史と文化の継承のために再び一つになろうとして枯松神社祭を開催することになった。枯松神社祭は、カトリック教会と隠れキリシタン、寺の三者合同で儀式が行われることに大きな特徴がある。ただし、カトリック黒崎教会の提案から始まった祭儀であるため、カトリック教会が主体的な役割を果たしている。

枯松神社祭の興味深い点は、合同で慰霊祭を営むようになってから隠れキリシタンのカトリックへの接近が見られていることである。隠れキリシタンの先代の帳方であった故村上茂氏は呪文化したオラショの言葉がまったく理解できなかったため、黒崎教会の司祭の指導を受け、オラショの言葉を意味がわかるように、キリシタン時代の祈りの言葉を用いて、カトリック風に変えた。そして彼は亡くなる直前カトリックの洗礼を受け、葬儀もカトリック式で行われた。現在の隠れキリシタンの葬儀は、茂氏の代より、カトリック教会から出版されている現行の「葬儀ミサ」の儀式書をモデルにしながら、隠れ独特の葬式のスタイルを交えて、新たに仕立て直されたものである²⁷。茂氏の代には80名程いた隠れキリシタンは現在50名程に減り、今後さらに減少していくことが予想される。先代の帳方のようにカトリック化するのか、あるいは祖先供養を大切にする仏教に傾いていくのか、あるいは最後まで隠れ集団を守り切るのか、注目していきたい。三者合同祭によってオラショが人々の前で唱えられ、隠れキリシタンの儀礼がカトリックと折衷するなど、三者の宗教接触による儀礼の習合は今後も続きそうである。

二番目に、桑姫社大祭は3か所の中でもっと

も神道に忠実な儀式である。桑姫社は淵神社の境内社として、小さいながらも鳥居や社殿を構えている。桑姫社大祭は特別な祭りを行うことはないが、宮司が桑姫の忌日にお供えをしてキリシタンであった桑姫を祀る。しかしながら、一神教のキリスト教と多神教の神道は相いれない宗教であり、キリスト教ではいかに偉大な人物であろうとも祭神にはなり得ない。しかし、当神社では桑姫が村の人々に良い影響を及ぼし、親しまれていた人徳だけを強調し、桑姫がキリシタンであっても違和感はないという。さらに2018年まで数年間は桑姫社にマリア像が置かれていた。2019年に筆者が訪問した際はマリア像が無くなっていたので、その理由を聞くと、「マリア像はそもそもある参拝者が供えたものであり、去年下げたのも参拝者によることであろう」とのことだった。社殿にカトリックのシンボルでもあるマリア像が置かれてもそれを見守った神社側の寛容な対応に筆者は驚いた。神道は八百万の神を祀る宗教であるが、桑姫社では宗教の垣根さえも越え祭神になり得ている。

三番目に、ジュリア祭はもっともカトリックの性格を表す儀式である。外部から司祭やカトリック信者が神津島を訪れ、信者も教会もない辺境な地で厳格なミサを行うのは世界でも類を見ないことであろう。

ジュリアは厳しい迫害の時代を生きていたため、わずかな記録しか残っていない中、彼女に関する伝承を支えたのは、伊豆大島の小さな祠であった。ジュリアの最初の流刑地であった伊豆大島で彼女の死を伝え聞いた人々は痛く悲しんで、その霊を弔うため小さな祠を建てた。それがおたいね明神(写真7)と呼ばれるものであり、ここに詣でるとオコリ病が癒えると言われていた²⁸。ここでは彼女がキリシタンであったことはすっかり忘れ去られている。しかし、最後の流刑地であった神津島で十字が刻まれた特異な形の塔がジュリアのものとして確定されるに従い、彼女の信仰は世に知られ、カトリックミサが執り行われることになった。



写真7 おたいね明神

しかしながら、教会もキリスト教信者もいない神津島で完全なカトリックミサの形を取り入れたことはかなり画期的である。戦後祭りを通して地域活性化を図る政策の一貫としてジュリア祭が推進された経緯があったと思われる。しかし、神津島の村長をはじめ、有志たちがジュリアの故郷韓国に出向いたり、法王に謁見するためにローマまで行ったりしたその行動力は村おこしの次元を超えているように思われる。ジュリアの人生に何か心動かされたものがあったか。あるいは墓や先祖を大切にする神津島の人々からすればジュリアの墓だと分かった以上祀らなくては行かない心情が働いたか。ジュリア祭を推進した当事者たちが故人となっており、確かなことは知り得ないが、村民の信仰とは無関係にジュリアの信仰だけを尊重した形でカトリックミサが取り入れられた。そしてジュリア祭を通して神津島ではカトリックとの宗教接触が行われ、現在まで2名がカトリックの洗礼を受けた。そしてミサの後に行われる日韓芸能大会を通して日韓文化交流も行われている。ただ、村民がミサに参加することはほとんどなく、外部から来るカトリック信者たちの巡礼地訪問のような性格が強い。

おわりに

日本のキリシタン神社の成立はキリスト教の厳しい弾圧の歴史と深く関係している。日本の三大キリシタン神社で祭られているジワン神父や桑姫、ジュリアは迫害時代に生き、苦しい人生を送った人物である。ただ、史料が少ないため不明なことが多く、とりわけジワン神父と桑姫に関しては誰であるかについても諸説ある。

しかし不思議にも彼らは歴史に葬り去らず、人々に語り継がれ、350年後には彼らを祭る儀式が開催されることになった。それを可能にしたのは彼らの墓が人々に慕われ、祀られ続けたためであった。枯松神社はジワン神父の墓があったところにやがて神社が建立された。桑姫社は桑姫の墓に建てた大きな石が大友の遺臣であった志賀家で祀られていたが、それが淵神社の境内に移されることになり、桑姫社を成立させた。ジュリアは最初流された伊豆大島では、彼女を祀る祠で人々に記憶され、神津島では十字が刻まれた朝鮮風の墓塔がジュリアのものと認定され、そこからジュリア祭が開催されることになった。

ただ、桑姫に関しては彼女がキリシタンであったことは忘れ去り、彼女の遺徳だけが語り継がれていくことになり、やがて淵神社の境内で彼女は崇められることになった。ジュリアも同じく神道の祠で祀られていたが、十字が彫られた墓塔の存在により、キリシタンとしての尊厳を取り戻し、カトリックミサにあずかることができた。枯松神社祭は明治以降宗教の分裂が起きた黒崎地域で、彼らの共通の先祖である潜伏キリシタンたちの聖地に再び集まることにより、地域の和解と平和を図ろうとしている。

厳しい迫害の歴史の中でも人徳の優れたキリシタンは人々に崇敬され、彼らの墓は大切に祀られ、それがやがてキリシタン神社を生み出すことにつながった。そしてキリシタン神社で行われている儀式はそれぞれ形式がかなり異なるが、墓への深い思いや祖先崇拜の風習がこれらの儀式を支える根底にあることは共通している。

注

- 1 文化庁宗教統計調査 (http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho 2020年9月検索)。
- 2 長崎の調査は2017年3月19日～3月23日、2019年11月1日～11月3日、伊豆大島の調査は2017年9月6日～9月7日、2018年10月13日～10月14日、神津島の調査は2019年2月7日～2月8日、2019年5月18日～5月19日に行われた。
- 3 2016年度において、長崎教区の信徒数は60,989人と全国16教区の中で東京教区の94,977人に次ぐ2番目となっているが、人口に占める割合は東京教区の0.492%に比べると4.408%と圧倒的に多く全国一である。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産ホームページ」(<http://kirishitan.jp/guides/707> 2020年9月検索)。
- 4 田北耕也、『昭和時代の潜伏切支丹』、国書刊行会、1978、9章と533-538頁。
- 5 片岡弥吉、『日本キリシタン殉教史』、時事通信社、1979、337頁。
- 6 ムンシ ロジェ ヴァンジラ、「枯松神社と祭礼—地域社会の宗教観をめぐって」、『人類学研究所 研究論集』第1号、南山大学人類学研究所、2013。
- 7 かくれキリシタンという名称は外部からこの人々に対する汎称として用いられていた言葉であり、当人たちはキリシタンという呼び方をしなかった。明治・大正時代には、復活したカトリック信者との対比の中で、外海では離れやふるキリシタン、むかしキリシタンといわれ、五島ではふる帳、もと帳といわれていた。当人たちは自らを平戸ではご尊さま、生月ではごっしゃ、コンパンヤなどの集団名をもって呼ぶのが普通であった。片岡弥吉、『かくれキリシタン 歴史と民俗』、日本放送出版協会、1975、17-21頁。
- 8 1820年頃、長崎奉行筒井和泉守政憲が儒者で長崎聖堂助教であった饒田諭義に命じて編纂させたもので、野口文竜湊義と画家打橋竹雲等が助けた。しかし脱稿までに意外の日数を要したために遂に刊行されることなく稿本のまま明治を迎え以後、長崎区役所・長崎市役所の書庫の中に眠っていた。1931年長崎史談会ではこれではいけないというので原本の翻刻公刊を企図し、昭和6年、四六倍版で本文584頁の本の500部限定出版を行い、世に公開した。長崎史談会編、『長崎名勝図絵』、長崎史談会、1931。
- 9 長崎歴史文化博物館所蔵。
- 10 花久留守一宮本次人キリシタン史研究

- ブログ「桑姫」再考—その②— (http://twoton1638.blogspot.com/2015/06/blog-post_11.html 2020年9月検索)。
- 11 片岡弥吉、「浦上草創期の頃の二、三の事蹟」、『長崎談叢』第19輯、長崎史談会、1937、11頁。
- 12 宮本次人は自身のキリシタン史研究ブログで、桑姫は大友宗麟の長女ジュスタであると主張している。彼女は1580年(天正8年)に受洗し、1627年(寛永4年)8月7日に逝去した。
- 13 田村襄次・平田都、『おたあジュリア』、サンパウロ、2000、276頁。
- 14 ムンシロジェ ヴァンジラ、『カトリックへ復帰した外海・黒崎かくれキリシタンの指導者 村上茂の伝記』、聖母の騎士社、2012、21頁。
- 15 片岡弥吉、前掲書、63頁。
- 16 1865年に大浦天主堂で信者が発見されてから、出津ではキリシタン禁制が続いているにもかかわらず堂々と信仰生活をする者が現れた。1867年にキリシタンである庄屋は発覚を恐れ、熱心派の意気をそぐために2枚の聖画を盗み出したが、それをめぐり激しい争いが起こり、後々の代まで対立のしこりが残ることになった。同上、91-94頁。
- 17 黒崎地域では隠れキリシタン組織の最高責任者を帳方と呼んでいる。
- 18 片岡弥吉、前掲書、88頁。
- 19 第10代志賀親憲は、竹の久保尾崎の庄屋屋敷に「桑姫の墳塋祠」を建立した。花久留守—宮本次人キリシタン史研究ブログ「桑姫」再考—その④—
- 20 片岡弥吉、前掲論文、12頁。
- 21 ルイズデメディナ、ホアン・ガルシア、『遙かなる高麗』、近藤出版社、1988、200頁。
- 22 同上、270頁。
- 23 同上、271頁。
- 24 木原悦子『おたあ・ジュリアのアリランが聞こえる』、毎日新聞社、1988、18頁。
- 25 神津島村史編纂委員会編『神津島村史』、神津島村、1998、57頁。
- 26 ルイズデメディナ、ホアン・ガルシア、前掲

書、215頁。

- 27 宮沢賢太郎、『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』、角川書店、2018、216頁。
- 28 三田元鐘、『切支丹伝承』、宝文館出版、1970、146-147頁。

主要参考文献

- 片岡弥吉、「浦上草創期の頃の二、三の事蹟」、『長崎談叢』第19輯、長崎史談会、1937。
- _____, 『かくれキリシタン 歴史と民俗』、日本放送出版協会、1975。
- 古野清人、『隠れキリシタン』、至文堂、1972。
- 田北耕也、『昭和時代の潜伏切支丹』、国書刊行会、1978。
- 田中英一、『キリシタンおたあジュリアの記録—美しき孤島の聖女』、神津島おたあジュリア顕彰会、1999。
- 田村襄次・平田都、『おたあジュリア』、サンパウロ、2000。
- 満江巖、『孤島の聖女』、聖望社、1942。
- 宮沢賢太郎、『カクレキリシタンの信仰世界』、東京大学出版会、1996。
- _____, 『潜伏キリシタンは何を信じていたのか』、角川書店、2018。
- ムンシロジェ ヴァンジラ、『カトリックへ復帰した外海・黒崎かくれキリシタンの指導者 村上茂の伝記』、聖母の騎士社、2012。
- _____, 「枯松神社と祭礼—地域社会の宗教観をめぐって」、『人類学研究所 研究論集』第1号、南山大学人類学研究所、2013、83-113頁。
- ルイズ デメディナ・ホアン ガルシア、『遙かなる高麗』、近藤出版社、1988。